
されど咎人は空を睨む

蒼風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

されど咎人は空を睨む

【Nコード】

N3330I

【作者名】

蒼風

【あらすじ】

堕ちた天使は悪魔と呼ばれ

欲と罪にまみれながら誘惑のダンスを舞う。

だが、無垢なる 願いは悪と呼ぶのか？

それすらわからぬまま 少女は剣を振るう。

共に歩むべき 少年と共に。

普通の高校生だった隆聖。

ちよつと変な友人と日常を過ごしていた彼は、突然に非日常に巻き込まれる。

それは、人外の化生との戦いの始まりでもあった。

はじまりは突然に

いつも感じていること。

この世界はなんて退屈で残酷で矛盾に満ちているのだろうか？

難しいことはわからないけど、でも、みんながみんな希望を持っている訳じゃなくて。

何をしていいのかわからなくて、でも、何かしなくちゃいけないで、そんな焦燥感をみんな抱えてるんじゃないだろうか？

この世界から消えてしまいたい、この世界をぶちこわしたい。

それは普通の感情じゃないのだろうか？

みんな、理性とか優しさとか戸惑いとか、そんなもんでせき止めてるだけで、僕らの内側には獣が隠されてて、いつも自由になろうと暴れてる。

この世界から抜け出したいと、そんな風に想いながら。

「おはよっす〜」

すさまじい大あくびを隠そうともせず、僕は扉を開けた。

部屋の中から返されるおはようの合唱。

所々に馬鹿にしたような笑いが込められてるのはご愛敬。

・・・ちきしょう、後でしめてくれる。

僕のやさぐれた想いに気づきもせず、笑いを顔に貼り付けながら、友人というか悪友というか腐れ縁の友春が近づいてきた。

チエシヤ猫のような笑いを童顔に浮かべているところが、似合わなくはないがなんかむかついてくる。

「おはよう、隆聖ってげふえええええ」

蛙のような・・・って、さっきから動物にたとえてばかりいるな・・・悲鳴を上げながら吹っ飛ばす18才の男。

「なんと言ったらわかりやがる、僕の名前はリュウセイじゃなくて、タカマサだつ。どこぞのお空にながれてるもんみたいに願いなんでかなえないっつの」

「み、みんな言ってるからいいじゃないか。なんで俺だけ蹴るんだよ」

「ん？むかつくから」

「なんじゃそりゃああああ」

この世の不幸を全てその身に受けたような顔で叫ぶ、佐伯友春、

彼女いない歴・年齢だった男。

黙っていればもてるんじゃないかと思われるが、この、真性ギヤグメーカーはかっこつけてもおもしろくなってしまうのである。

不幸だとは思うが、可愛いそうだとは思わない。

だって、友春だし。

ムンクの叫びのように顔を変形させた友春をほっときつつ、自分の席にバッグを置いていると、後ろから声がかけられた。

「相変わらず仲がいいね」

クスクスと楽しそうに笑う少女の名は高木明日香。

背が小さくてかわいくて守ってあげたくなる外見に反し、思いつきり姉御肌で、知らないで近づく男どもを屍の山に突き落としている女だ。

そして、友春の彼女でもある。

二人がどうしてつきあうようになったのかはこの学校、私立高天原高校の七不思議の一つとして認定されているらしい、いや、まじで。

二人でいると、一瞬ほのぼのとした雰囲気を感じるのに、血まみれで凄惨な光景を目にすることになるのも七不思議の要因の一つなのだろう。

まあ、恋つちゃあわけわからんもんだからなあ・・・とわかったように一人納得していると、しばらくぼんやりしてた僕の頭を何かが直撃した。

涙目で目を開けると、笑顔の明日香。

その握られた拳には、若干の煙と、ほんのりと紅に色づけられた液体。

「それ・・・僕の血なのでしょうか？お嬢様・・・」

「ん？何か言った？」

「ナンデモアリマセン、エエ、エエ」

機械仕掛けの人形のようにカクカクした動きを見せながら、彼女に向き直る僕。

我ながら情けないが、しかたない。

だって、怖いし。

「まったく、人の話を聞かないからこうなるんだよ？で、どこまできいてた？」

「まったくきいてませんでした、すみませんごめんなさいゆるしてください」

しかたないなあ、と深い深いため息をついた明日香は、僕に問いかける。

「今日、転校生が来るって知ってる？」

「いや、知らないなあ」

「ほんとに、そういう情報に疎いよね。みんな、この話で持ちきりなのに」

やれやれともう一度ため息をつく少女。

だって、しかたないじゃないか、いまきたばかりだし・・・という反応はやめておく。

だって、怖いし。

「ん？でも、どうしてそんなに話題になるんだ？？別に、そんなに不思議じゃないだろう？転校生ってだけなら」

この学校は新設校なので、頻繁にはないにしろ、それなりに転入生がやってくる。

自由な校風と、進学校という要因が重なる上、芸術系の授業に置いても著名な講師を招いたりするからだ。

将来の選択肢が広がる、という点では魅力があるのだろう。

「今回はちょっとちがうんだなあ、いつもとは」

そういつて死角からやってきた友春。ムンクから復活したらしい・・・敵ながらあっぱれである。

「今度転入してくるのは、なんと女の子。しかも、めっちゃ美人らしいふう！」

星辰の彼方まで吹き飛ぶ友春。

拳を突き出した体勢で固まっている明日香。

「他の子に対して美人とか言っていると、彼女に怒られるんだよ、普通は？」

「あゝ、かつこつけてるところ悪いんだけど・・・友春、落ちたぞ、窓突き破って、外に」

大きな穴があいた窓ガラス。

粉々に粉碎されたその光景を見ながら、僕自身もため息をついた。

そんなこんなで始まるHR。

このあと、美人の転入生とかの紹介があつて、おきまりの歓声と委員長の制止の声があつたりして、なんだかわけわからんまま授業に突入するんだろうなあ・・・とか思ってた。

・・・・・・そう、この瞬間までは。

突然わき上がる悪寒。

本能的に全身の毛が逆立つ。

その理由を確かめる前に、あり得ないことが起きた。

突き破られたままだった窓から誰にも気づかれないうちに迷い込んだスズメが、いきなり大声で叫んだのだ。

しゃがれた老人の声で、呪詛の言葉を。

「なにもわからず、なにも考えず、ただ享樂とした人生を謳歌する愚者どもよ。呪われる詛われるノロワレロ!!」

その叫びがなにか理解するより早く、変化は起きた。

それは、静かなものだった。

音さえも立てず、姿が変わっていく・・・それは脱皮のようでもあり、変態のようでもあった・・・異形へと。

誰も話せなかった。

誰も話すことなんてできやしなかった。

恐怖、放心、疑問。

そんな感情が、心の隙間からにじり寄ってくる。

誰かが手にしたペンを床に落とし、その小さな音が教室いっぱいに響き渡ったとき・・・その感情は、一気に爆ぜた。

「う、う・・・うわあああああ!!!!!!」

誰かが騒ぎ出す。

そして、それをきっかけにして、みんなが我先にへと出口へと殺到する。

パニックになりかけた教室。

だが、異常は続く。

時が、止まった。

友人を押しつけようとした男子の手が、突き飛ばされ転がる直前の女子が、その場で制止した。

動くものは、この空間にはなかった・・・先ほどの怪物と、自分以外には。

「な、なんで・・・???」

化け物がいるのか？みんなが動かなくなったのか？そして、自分だけが動けるのか？

その中の何が聞きたかったのだろうか？もしかしたら、その全てなのかもしれない。

パニックに陥りかけた僕が、正気を失わなかったのは、廊下から響いてきた靴音のおかげだった。

静かに、ゆっくりとした足取りで、その足音は近づいてくる。

そして、僕たちの教室の前で、不意に止まった。

僕の視線はその先に向かう。

化け物のよどんだ黒い瞳も、その先へと向かう。

そして、二つの視線が伸びた先には……少女の姿があった。

少女……というのは、間違いなのかもしれない。

妖艶な娼婦にも、戦場に立つ戦士にも、あどけない少女にも見えるその女は、化け物を一別すると、小声で何かを呟いた。

その瞬間、新たな変化が起こる。

彼女の背に、翼が広がる。

闇のような、深い深い漆黒の翼。

その翼が開ききったとき、化け物は叫んだ。

「我が同胞よ？何故に我に立ちふさがる？欲望を糧にし、天を恨み、地を這いしものの宿命から何故逃れようとする？否、断じて逃れることなど出来ぬ。欲のままに啜り、欲のままに滅びを撒くのが我らの道理」

しゃがれた老人の声。その声に対するは凜としたささやき。

「逃れようとはしてない。ただ、私の願いのままに歩んでいるだ

け」

くつくつくつとひしゃげた笑い声が、止まる時の中で鳴り響く。

「ならば、我が欲と汝の欲、どちらが強いものか競おうではないか。賭けるものは自らの命。くくつ、だが、我が滅びもまた我が願いなり。結末はどちらでもよいのだ・・・くくくくつ」

嘲りの声に耳も貸さず、少女はその漆黒の翼を二、三度震わせた。

その音が合図であるかのように、動きが起こる。

そして、それは、僕自身が踏み込んだ、非日常の世界への合図でもあったんだ。

はじまりは突然に（後書き）

プロットも作らないまま勢いではじめてしまった・・・（；-_-；
）
なんとか破綻しない物語を作っていいこうと思います。
読んでもらえると嬉しいですわぁ

傷つく覚悟

幼い頃、夢を見た。

自分がヒーローになって、悪と戦い、勝利する光景。

みんなを守りたくて、みんなに褒められたくて、叶うはずのない夢を追い、テレビに釘付けになった。

大人になって、それが作り物だと知って、人生そんなもんだって笑い飛ばしながら生きてきた。

だけど、それが現実になって。

悪者は、怪物は、いるんだって思い知らされて・・・。

「だけど、こりやないでしょ、神様・・・」

思わず天に召します神様に深い深いため息を送りながら、僕は天を仰いだ。

僕の目の前では、相変わらずひろいつくふぁんたじくな光景が広がっている。

翼を翻し、手にした漆黒の刃を振るう美少女。

その剣戟をかいぐり、少女の柔肌に牙を突き立てようとする異

形の化け物。

そして、それを遠くからへたり込んで眺める僕。

かなり異質で、でも、かなり間抜けな光景がそこには広がっていた。

最初の頃に襲ってきたのはパニック。

そして、恐怖。

だけど、あまりにもわけわからなすぎて、現実離れしすぎて、なんだか落ち着いてきちゃったのも事実で。

まるでテレビの特撮もの見てる感覚で見てただけど、これがまた、すごく綺麗だった。

異形、異形っていいまくってるけど、実際、化け物には精緻なCGを目の当たりにしているような感動があったり。

それに対しての女の子は、もう、美少女でかつこよくて綺麗で、なんていうか、萌え？ってかんじで。

それはもう、よくできた映画を見てるような状況で眺めてたわけですよ・・・そう、それが起こるまでは。

時間が止まったかのように動かない教室の中、その中に残された生徒はあまりいなかったけど、それでも逃げ遅れた何人かは必死の形相でとまってて。

彫刻みたいだなあと余裕をかましてたら、化け物が跳ね飛ばした机が、たまたま僕の隣にいた友春の顔にぶち当たった。

飛び散る鼻血。

ちよつとへこむ鼻の頭。

うわ、すつげえあほっぽいなあ・・・なんて笑いかけた僕の表情がそこで止まった。

鼻血・・・？

血の気がひいた。

いままで動かなかったから意識してなかったけど、もとは僕の友人たちだ。

それが傷つけられるってことは、死ぬ可能性もあるってこと・・・か？

膝が震える。

急速に現実感が襲う。

拳を打ち込んで無理矢理足の震えを止めようとしていた僕の目に、それは映った。

舞うようなステップで獣の攻撃をかわす少女。

その空けられた空間の先には・・・明日香がいた。

必死の表情で出口に向かう途中の、明日香がいたんだ。

叫びは出なかった。

のどがひりひりと痛んで、声なんてなにも出てこなかった。

立ち上がる。

走り出す。

いつも何気なくやってる行動が、ひどくひどく緩慢で、もどかしくて、くやしくて、僕はただ見てることだけしかできなくて。

全ての神様に、どつかにいる仏様たちに祈りながら、でも、それでも届かなくて。

絶望が襲いかかって・・・でも、そのとき、とんっって軽い音がした。

反射的に閉じかけた瞳を向けると、明日香のことを突き飛ばす少女がいた。

救われた・・・そんな安心感はなかったよ。

だって、目の前の少女に獣が迫ってたんだから。

無表情の少女の顔に、焦燥と、安堵と、あきらめが浮かんだったから。

……ふざけんな、っておもった。

自分の目の前にあるわけわからん状況にも。

目の前で諦めかけてる、名前も知らん女にも。

なによりも、なんもできやがらない自分自身に。

「っざっけんなあ!!」

いままで出なかったとは思えないほど大きな声が自分ののどから絞り出されて、自分の体がものすごく軽く感じられて。

気がついたら、吹っ飛んでた。

痛みはなかった。

それ以上に、怒りがあつたから。

だから、自分の腹を食いちぎってる奴の頭を思いっきりつかんで、驚いた顔をしてる少女を思いっきりにらみつけた。

憎しみなんかじゃない。

その子に対する憎しみなんて、あるわけがない。

いまはただ、とにかく、みんなを傷つけようとして、自分自身を傷つけたこいつをぶっ飛ばしたかった。

だから、痛かったけど、苦しかったけど、彼女がもっていた刃で

この化け物を切り裂いたとき、笑うことが出来たんだ。

酷く眠かった。

自分の下にたまった水たまりが冷たかった。

でも、なんかは出来たかなって満足はあったんだよ。

そして聞こえた。

「生きたい？」

僕は答えた。

「生きたい」

光が、生まれた。

傷つく覚悟（後書き）

とりあえず、あらかじめ書いてあった二話分を公開。
この先がんばります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3330i/>

されど咎人は空を睨む

2010年10月9日03時06分発行